

## 青刈ヒエの栽培法について

## 第4報 品種の早晚と刈取時期について

大野 康雄\*・佐藤 忠士・高橋 伸夫

(岩手県立農業試験場・\*同県北分場)

Studies on the Cultivation of Soiling Barnyard Millet

## 4. Races and those reaping stages

Yasuo ŌNO\*, Tadao SATO and Nobuo TAKAHASHI

(Iwate-ken Agricultural Experiment Station, \*Kenpoku Branch,  
Iwate-ken Agricultural Experiment Station)

## 1 ま え が き

ヒエは、旺盛な生育量と栽培管理の容易なこと、家畜の嗜好性の良好な点から青刈飼料作物として適しており、先に自給飼料強化を目的にその研究を進めてきた。今般、標題について検討した結果を報告する。

## 2 試 験 方 法

○試験場所(岩手農試圃場)火山灰土壌

○試験区の構成

第1期作(表1)

第2期作(表2)

表1 第1期作

供試品種：本県在来早生種、与市早生他9品種、本県在来中生種、朝鮮他6品種、暖地系暖生種、飛驒在来他9品種

供試条件

| 項 目<br>熟期別 | 栽植様式  | 播 種 量 (‰) |     |                                                                                                                                          |      |      |      |
|------------|-------|-----------|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|------|------|
|            |       | 0.1       | 0.2 | 0.4                                                                                                                                      | 0.6  | 0.8  | 1.0  |
| 早 生        | 条 播   | ○         | ○   | 備考：<br>施肥量(‰)<br>N : 1.0 + 0.8 (硫安)<br>P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> : 2.0 (過石 1.0 + 熔燐 1.0)<br>K <sub>2</sub> O : 2.0 (塩加)<br>播種期：5月23日 |      |      |      |
|            | 全 面 播 | ○         | ○   |                                                                                                                                          |      |      |      |
| 中 生        | 条 播   | ○         | ○   |                                                                                                                                          |      |      |      |
|            | 全 面 播 | ○         | —   |                                                                                                                                          |      |      |      |
| 晩 生        | 条 播   | ○         | ○   |                                                                                                                                          |      |      |      |
|            | 全 面 播 | ○         | ○   | ○                                                                                                                                        | ○    | ○    | ○    |
| 刈取り時期      | 早中種   | 7/28      | 8/2 | 8/9                                                                                                                                      | 8/19 |      |      |
|            | 晩生種   | 〃         | 〃   | 〃                                                                                                                                        | 〃    | 8/25 | 9/20 |

表2 第2期作

供試品種：本県在来早生種与市早生他10品種

供試条件：

| 項 目<br>熟期別 | 栽植様式  | 播 種 量 (‰) |                                                                            |     |     |     |
|------------|-------|-----------|----------------------------------------------------------------------------|-----|-----|-----|
|            |       | 0.2       | 0.4                                                                        | 0.6 | 0.8 | 1.0 |
| 早 生        | 条 播   | ○         | 備考：<br>施肥量(‰)<br>N : 1.0 (硫安)<br>P : 2.0 (熔燐 1.0 + 過石 1.0)<br>K : 2.0 (塩加) |     |     |     |
|            | 全 面 播 | ○         |                                                                            |     |     |     |
| 晩 生        | 条 播   | ○         |                                                                            |     |     |     |
|            | 全 面 播 | ○         | ○                                                                          | ○   | ○   | ○   |

播 種 期：7月24日

刈取時期：9月18日

### 3 試験結果

#### 1. 第1期作について

草丈・茎数の推移： 出芽は播種後8～10日で、そろいも良好であった。草丈は早生・中生種が晩生種よりも8月上旬までは高めに推移し、茎数は晩生種に比べ早生種は60%、中生種で30～40%多い傾向にあった。

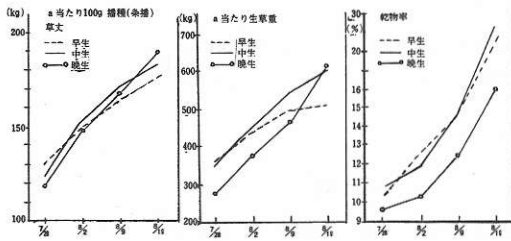


図1 早・中・晩による草丈・生草重・乾物率 (α当り)

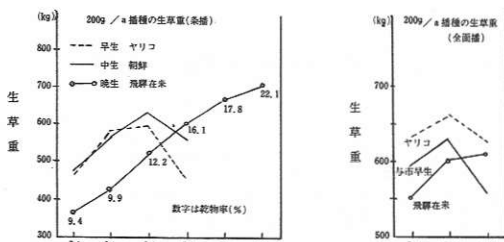


図2 播種法による生草重 (α当り)

生草重と乾物重： 前記の関係から早生、中生種は、8月上旬までの刈取りでは晩生種よりも多収で、乾物率も高めであった。8月下旬以後の刈取りでは晩生種が多収となった。α当り200g播種は、条播・全面全層播とも、α当り100g播種に比べて多収であったが、早生・中生種は8月2日以後出穂期にかけて倒伏がみられるので、7月下旬から8月上旬までの早期刈取利用に適する。

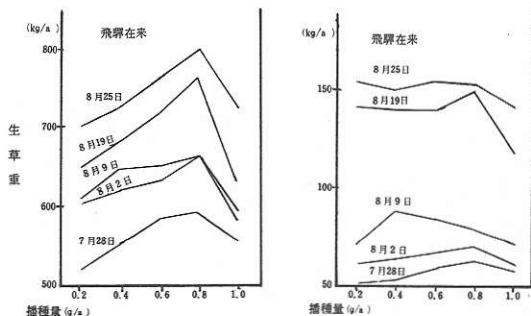


図3 全面全層播きの播種量刈取時期 (α当り)

図3は、晩生種の省力多収的な全面全層播きの播種量刈取時期を検討したものである。

生草重は、α当り200g～800gまでは、いずれの刈取時期でも播種量増が多収を示すが、α当り1kg播種では、茎が細く8月中旬から下旬にかけてなびき倒伏が多かった。

8月下旬までの刈取りを目的とした全面全層播きの播種量は、α当り600gが、耐倒伏性からみて安全である。

#### 2. 第2期作について

(1) 現在栽培されている早生及び中生種を7月下旬播種し、9月中・下旬刈取った場合には、条播でα当り0.5t～0.55t、全面全層播でα当り0.65tの生草重となる。

(2) 晩生種(飛騨在来)の全面全層播、播種量α当り600gでの生草量は、α当り0.7tとなるが、乾物率が低いので、前期刈取時期より遅らせた方が有利である。

(3) この作型は、冬作物(麦類、ニンニク等)あるいは生育期間が短い春播き作物(レタス、エンバク、青刈作物等)の跡から冬作物までの期間の土地利用に適用されると思われる。

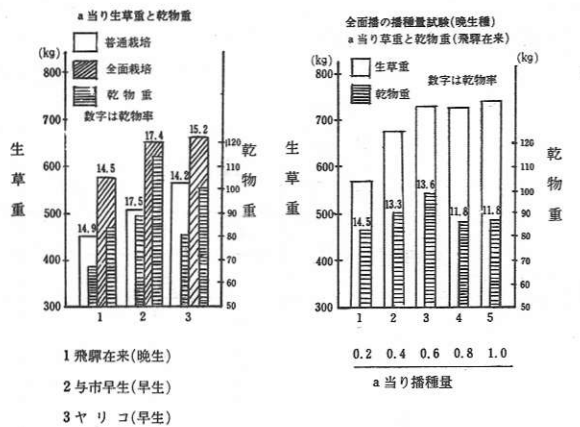


図4 栽培法と全面播きの播種量試験

### 4 おわりに

早生・中生種を5月下旬播種し青刈りする場合には、8月上・中旬(穂孕期～出穂期)が最多収となり、これより遅れた場合には倒伏の恐れがあるため適期刈が望ましい。晩生種は8月下旬以後多収となるため、全面全層播(播種量α当り600g)で8月下旬～9月上旬が刈取適期となる。

なお、遅播きの7月下旬播種では、盛夏であるので出芽時の乾燥に注意が必要であろう。

ヒエは不良環境にも強く、特に水稻生産調整に伴って排水不良田のため一般畑作物の導入が困難な地帯での導入が有望視され、今後転作田における多収省力栽培体系、利用加工体系等の確立が必要である。